

『白虎通』に見える外戚への思想

早稲田大学大学院文学研究科
東洋哲学コース博士課程一年
山岡亮晴

○要旨

後漢政治史・後漢思想史の分野において、章帝期に開催された白虎観会議及び、その議事録である『白虎通』の重要性はたびたび指摘されてきている。しかし、白虎観会議が章帝期の如何なる政治的要請により開催されたのかという問題については、いくつかの研究は在るものの、未だ考察の余地を残しているように思われる。そこで、本発表では、以下の検討を通して、『白虎通』と章帝期の政治状況との関わりを考察する。

第一に、『後漢書』の記述に基づき、章帝期における外戚勢力、特に馬氏および竇氏の台頭を分析する。章帝による馬氏の優遇は、馬皇太后に対する孝に基づくものと理解し得るが、竇氏の優遇には同様の必然性が認めがたい。しかし、章帝は、宋氏が産んだ皇太子劉慶を廃し、竇皇后が産んだ劉肇を新たに皇太子に立てており、皇太子の正統性に揺らぎが生じていた。このような状況の下、功臣や宗室に権力を集中させない、後漢初期以来の統治方針を踏まえ、章帝は皇太子を補佐する輔弼の臣として、外戚に依らざるを得なかったことを指摘する。

第二に、『白虎通』爵篇に見える三年喪の記述を検討する。『白虎通』は、君主が一度王位を継承した後に、再び喪に服するという独自の解釈を示す。その解釈の背景には、服喪期間中に国政を担う冢宰の存在を強調する意図がある。そして冢宰を宣揚しつつも、その爵禄を本来の卿ではなく大夫に準える点に特徴がある。この特徴には、外戚を輔弼の臣として位置づけるものの、その権力の過度な伸長を抑制しようとする、章帝の政治的意図が反映されている可能性を指摘する。

以上の検討により、『白虎通』に見える喪礼解釈は、外戚という当時の政治状況と、密接に結びついて形成されたものである可能性を指摘する。